東京成徳大学・東京成徳短期大学図書館分館

図書館だより

Vol. 31
2021. 3. 1 発行

図書館運営委員会

推薦図書

『下流志向　−学ばない子どもたち　働かない若者たち−』
内田樹　著
講談社文庫

推薦教員
健康・スポーツ心理学科
石﨑一記教授

Berlyne は、人の基本的な傾向としての好奇心に注目し、特に探索行動を動機づける知的好奇心の仕組みを説いている。人は誰でも、分からなさや退屈を不快に感じて、何かワクワクすることはないかと新しいものを求めたり、納得ができる説明や仕組みを求めたりするとされる。暇つぶしにいそしむ姿は、電車の中など身近なところでよく目にする。また、「知るは喜び」という言葉もあるし、「その人の書棚をみればどんな人かわかる」とも言われる。

ところが最近では、分からないこと、知らないことは、必ずしも人を不快にさせるわけではないかもしれないと思う場面も少なくない。「最近の若者はものを知らない」という苦言はいつの時代でも聞かれるが、最近のそれは、むしろ「ものを知らなくても平気である」とか、「知ろうとしない」ということかもしれない。

内田樹は、この本に「学ばない子どもたち、働かない若者たち」というサブタイトルをつけ、「なぜ学ばなくなったのだろう」というテーマについて、丁寧に考察している。みんながそうであるから他の友人達との比較の中で自分が学んでいないことには気づかない、知らないことは存在しないことにすればいいからあちこちスキップしている、役に立つこととそうでないことの区別に厳しい、学びに対しても消費者としてコストに見合う商品を手に入れようとするなど、現状を例に挙げながら、こういった風潮を読み解いていく。筆者は神戸女学院大学名誉教授（哲学）の武道家であるが、講演会の記録に手を入れたものなので、とても読みやすい。

かつて授業評価アンケートの分析を行ったところ、授業満足度の高さが、出席や課題などの「厳しさ」とは逆比例し、資料提示の方法や印刷資料の配布など「サービスの高さ」と比例していた。授業に出ることや学ぶことそれ自体は、単位やいい成績を手に入れるための「不快なコスト」として、そのための努力を低減する配慮は「サービス」として受け取られているのかもしれないと考えたことがある。

学ぶこと、働くことは、何かのための手段ではなく、自分が自分であるための人生の本質であるという考え方を、あなたはどう思うだろうか。ぜひ、本書を読んで、それを手掛かりに考えてみてほしい。

3 階教員推薦図書架に展示しております。
ぜひ、手に取ってみてください。